

金澤の地子地に小幡氏から建立したとある。

**ソウトシヨリ 惣年寄** ↓トヲムラ 十村。

**ソウハンチヨウ 宗半町** 金澤の舊町名。

藩政中は諸士の邸地のみで、商家はなかつた。舊傳に、昔中川宗半の居邸があつた、め町名に呼んだといふ。蓋し宗半の居邸といふものは、その隠居所をいふのであらう。

**ソウフクイン 藏福院** 鳳至郡石井に在つて、曹洞宗に屬する。寺記に天文廿一年清林宗藤の開基に係るとある。

**ソウメン 索麴** 古來鳳至郡輪島のもの名産とし、能登名跡志輪島の條に、『輪島索麴・堅地漆器・熨斗鮑類・海草之類名物也。中にも白髮索麴は御献上の上品也。』とあつて、御献上とは藩侯から幕府に對してなした意である。後世河北郡高松の木津屋藤右衛門・小川屋喜三八・元野七兵衛等、亦索麴の製法を輪島から傳習し、冬期の副業に當てたが、嘉永中藩から資金の貸附を得、包装に御仕入索麴の印を捺すに及んで益有名となり、隣邑木津でも之を製することになつた。

**ソウメンゴリ 素麴鮓** ↓シラウヲ 白魚。

**ソウユウカン 壯猶館** (一)創始―壯猶館は加賀藩の洋式諸學校中の最初のものであつた。館名は詩經小雅采芣の篇なる克壯其猶から採る。又壯猷館にも作るものは、猷字は猶字と同じいからである。初め藩士に大橋作之進といふものがあつて、夙に自邸に西洋砲術の研究所を置き、長大隅守の家臣河野久太郎、菊池大學の家臣加藤九八郎と共に翻譯書に就いて講究し、又醫師黒川良安に囑して洋書を調査せしめ、後には江戸から松下謙作を聘して、その術を傳習した。是に於いて藩侯

前田齊泰は、從來火矢を家藝とした小川群吾郎・小川權之助・小川兵左衛門に命じて共に學ばしめ、嘉永六年金澤上柳木昌に在つた篋庫を廢し、その敷地を擴張して西洋流火術方役所の所管たらしめたが、安政元年正月建築を初め、八月竣成するに及んで壯猶館と稱し、藩士以下の砲術を學び、練兵に従ふ所とした。

(二)教師―壯猶館に於いて初めて蘭學を講じたのは鹿田文平であつたが、安達幸之助之に次ぎ、幸之助は後に英學に轉じた。尋いで三宅復一・岡田秀之助も亦英學を授け、幕士秋山安房の臣で蘭學の兵學者であつた佐野鼎も聘せられて稽古方惣棟取となつた。

(三)教科―壯猶館で教授した科目は、砲術・馬術・合圖・洋學・醫學・航海・測量等であり、組頭又は奉行たるものに、算木を用ひて備立・號令を練習せしめる法もあつた。砲術は蘭式に初り、洋學も蘭學で、文久二年には既にその設があり、砲術に關する洋書を読むを目的とした。同年六月又蘭法醫學の會讀を初め、從來明倫堂で行つた蘭法醫學の開業試問をこゝに移した。同月館内に堀場を設け、砲術を修めしめた。又訓練場を開き、小立野彈藥所・牛坂村彈藥所・土清水村(硝硝)製造所・小柳村製造所を附設し、軍艦を購入して、西町軍艦所・七尾軍艦所に屬せしめた。航海及び測量學は文久三年に至つて課し、銃砲術練習は常棣古と振替古とあつて、前者は毎日練習し、後者は志願者をして六月月邊番操練せしめた。

(四)明治の改革―明治元年英式兵制を採用すると共に、軍事教育の規模亦大に擴張した。即ち九月十三日經武館を壯猶館に合併し、之

を學校總裁の支配に屬せしめて學政の統一を圖り、壯猶館を以て主として歩兵小銃練習の所となし、經武館の舊式武術習練は悉く之を廢し、その建築物を藩侯世子前田利嗣の居館に當て、別にその構内に、騎兵塾所並に厩舎たる群龍館(一名群龍舎)、喇叭稽古場たる威震館、歩兵小銃練習場たる懷忠館、大砲練習場たる震天館、兵學並に洋算練習場たる飛雲館(一名元雲館)を置いて悉く士族の武學校とし、城内なる御普請會所を改めて雄飛館とし、卒族の大砲・小銃及び喇叭練習場に當てた。喇叭は英式訓練に伴うて起つたものである。叙上の諸館は相繼いで計畫造營せられたもので、その全備したのは二年三月であつた。

同元年また七尾軍艦所・西町軍艦所・小立野彈藥所・牛坂村彈藥所・土清水村(硝硝)製造所・小柳村製造所は、壯猶館を離れて海防方の所管に歸した。二年一月又壯猶館内に英學所を設立し、幾くもなく之を元御細工所に移し、更に西町神護寺に轉じて致遠館と改稱し、別に七尾軍艦所に英學所の分校たる七尾語學所を開設した。その後航海術を教授する爲に、釣深館を壯猶館内に設け、次いでそれを西町軍艦所内に移した。壯猶館以下群龍・威震・懷忠・震天・飛雲・雄飛の諸館は、三年佛式の兵制採用せられて、一面には士官養成所たる齊勇館の設立せられ、一面には常備軍隊の組織せられるに及んで、悉く閉鎖せられた。

(五)壯猶館の醫育―加賀藩末期の醫育は、西洋兵學と共に壯猶館を以て發祥の所とする。この館に於いては、初め砲術・馬術等を研究する爲蘭書を調査したが、當時蘭書を解した者は即ち醫師であつたから、文久二年に至つては傍ら蘭醫學の會讀を行ふことになり、黒川良安・津田淳三・明石昭齋・太田良策(後美田中一庵)・鈴木儀六等、皆自宅に醫業を開く傍、壯猶館に出務してその事に従うた。而して同年六月の文書に、『蘭醫書會讀等も御取立に相成候間、是亦望之者は罷出可申候。右に付是迄蘭醫試業之節は、學校に於いて見届來候得共、以來壯猶館にて見届候筈に候。右之通可申渡旨被仰出候條、一統可被申談候事。』とあるによつて見れば、從來學校即ち明倫堂に於いて執行した醫術開業試験を、壯猶館の主管に移したもので、同時に蘭法醫學の勢力が獨立せんとする經過が知られる。次いで慶應元年種痘所が出来て黒川良安が棟取となり、同三年七月卯辰山養生所の起るに及んで、壯猶館の醫育はまた之に移つた。

**ソウリユウ 宗龍** ↓シノウソウリユウ 眞翁宗龍。

**ソウリユウジ 宗龍寺** 金澤鷺町に在つて、對曾山と號し、曹洞宗に屬する。慶長十七年不破源六之を塩屋町に創立し、父の法諡を採つて宗江寺と稱し、僧明庵を招いて寺主とした。後法嗣に關する爭議が起つて檀越分散したが、萬治三年岡島市郎兵衛は請うて寺を小立野に建立し、岡島氏の祖先の法諡を以て宗龍寺に改め、次いで又今の地に轉じた。

**ソウリヨウ 惣領** 鳳至郡河原田郷に屬する部落。能登名跡志に、『輪島より一里十町、本馬六十一文、輕尻三十六文、人足十八文。家數六十軒ばかり、所々に散りてある村なり。此邊は河原田の郷也。此散村に深見といふ所に、親池とて恐しき池あり。昔蛇神住んで人を取る。』とある。又文化の書上には、村御印